



Subaru

男声合唱団

ニュース№598

‘17. 1. 22

昂 11 回コンサート第 1 部・2 部の名曲 4 曲のレッスンを開始！

1月20日

□ 1月20日(金) 18:00～20:30 昂定例レッスンが開催されました。佃さんの体操、伊藤さんのヴォイストレーニングのあと、本並先生の指揮、森二三さんのピアノで、「フィンランディア」「想像力」を、休憩をはさんで「ルスカエ・ポーレ(ロシアの曠野)」と「ぶどうとかたばみ」の4曲をレッスンしました。

4曲とも合唱曲としては名曲でよく知られた曲ばかりです。内2曲は昂でも過去に歌い、再度11回コンサートで取り上げたい、曲の価値は今も衰えず、なお一層歌うべき時代の歌と言えましょう。今日のレッスンでは、楽譜と共に正確な音取りとメロディの確保に力を入れました。

参加者は全37名でした。(T1:10/11、T2:10/10、BR:9/10、BS 6/9)



○連絡事項

技術部より、本日の技術部会の第11回コンサートに向けての議論を踏まえ、プログラムと取り上げる曲目についての理解を深めよう！と報告がありました。

- ・プログラム「歌う会」で「あの青い空のように」「上を向いて歩こう」「見上げてごらん夜の星を」の3曲、またよく知られている曲として、「フィンランディア」「さとうきび畑」「芭蕉布」「沖縄を返せ」「仕事のうた」の5曲、全部で24曲を歌うなかで、1/3はポピュラーな曲。そして、昂の良さを知ってもらう合唱曲をちりばめている。「一この道を行こうよー」のテーマで。このプログラムに自信を持ち、しっかり練習しましょう！

- ・ 6月から第1日曜13:00～17:00レッスン日開設。7月から第1日曜日を13:00～15:00昂レッスン・15:00～17:00特団員とのレッスン日を開設します。

- ・休まずにレッスンに参加してください。普段の自習・個人レッスンをもっとしてほしい！
音程をとれない人は録音機を利用して、レッスンを録音して聴いて欲しい。
- ・各曲の音源をつくります。まだもらっていない方は申し込んでください。



男声合唱団
すばる

第11回 昂コンサート

—この道をゆこうよ—

2017年 **12月3日** 日

開場/13時30分 開演/14時 終演予定/16時

豊中市立文化芸術センター大ホール

入場料/1,500円(全席自由席) 高校生以下、障がい者と介助者(1名)の方は全席 500 円引きます。

指揮 本並 美徳
ピアノ 伊藤 知 西應 静 森 二三

<第1部>
日々草
花の歌
ぶどうとかたばみ
君死にたまふことなかれ
想像力
忘れっぽい人に
降りつむ
街を返せ
この道

<第2部>
飲びのナーダム
会場の皆様と共に
あの青い空のように
上を向いて歩こう
見上げてごらん夜の星を
ヴォルガのうた
ルスカエ・ポーレ
フィンランディア

特別団員と共に
さとうきび畑 (短縮バージョン)
芭蕉布
労働者の合唱
沖縄を返せ

※ プログラムは都合により変更することがあります。

主 催：男声合唱団「昂」 URL <http://subaru.news.coocan.jp/>
お問い合わせ：立川孝信 (090-6058-5652) 本並美徳 (090-9270-2971) 岡邑洋介 (090-8168-9347)

仕事のうち

男声合唱団

「昂」

第11回
コンサート

特別団員募集

2017.12.3(日) 豊中市立文化芸術センター大ホール

「共に沖縄支援の歌をうたいませんか」

基地ある故に傷害・暴行事件が後をたない沖縄、アメリカの基地はいらないと怒りに燃える県民の心を踏みにじるかのように自然豊かな辺野古の海・やんばるの森に最新鋭の基地建設をアメリカ軍の言いなりに進める日本政府、この暴挙に対し沖縄県民はもちろんのこと世界中から平和の波が押し寄せている。

私たち昂も憲法第9条を守り、二度と戦争を繰り返さない願いを込めて、戦争につながる基地を作らせない沖縄県民に心を寄せて支援のうたごえを広げたいと思います。新しくなった素晴らしいホールで共に歌いませんか！

演奏曲

さとうきび畑 寺嶋尚彦 曲
(歌唱バージョン) 尾上和彦 編曲
芭蕉布 沖縄民謡
労働者の合唱 歌劇沖縄より
沖縄を返せ 荒木栄 曲

練習日

7/2・8/6・9/3・10/1・11/5・11/19

(毎月第1日曜日、最終の11/19は第3日曜日の通しレッスンです)

15時～17時

練習会場

ねむかホール

団費

2,000円

(全日程・楽譜込み)

男声合唱団「昂」(すばる)

「昂」(すばる)は、2000年春に大阪で数少ない男声合唱団として誕生。反戦・平和の歌、全世界友好の歌、いのちと暮らしを守る歌、社会の真実を伝え、人々の心に連帯と勇気を引き起こす歌など、楽しく歌うと共にレベルアップに努め、「日本のうたごえ祭典・合唱コンクール」では、数多く上位入賞。「うたごえは平和の力」を合言葉に、中国南京での友好コンサートや、東日本大震災では、陸前高田市と大船渡市におもむき、復興支援の交流演奏会を開いたほか、大阪を中心に各地域の催しで活発な演奏活動を展開している。

昂のこれまで

2000年	団結成(20名)	
2002年	日本のうたごえ祭典コンクール	1位
2003年	日本のうたごえ祭典コンクール	3位
2004年	ファーストコンサート(クレオ中央)	
	日本のうたごえ祭典コンクール	1位
2005年	日本のうたごえ祭典コンクール	1位次席
2006年	セカンドコンサート(クレオ中央)	
	日本のうたごえ祭典コンクール	2位次席
2007年	3rd春を呼ぶコンサート(阿部野区民センター)	
	日本のうたごえ祭典コンクール	銀賞
2008年	4thコンサート(ザ・シフニーホール)	
2009年	5th春を呼ぶコンサート(阿部野区民センター)	
	中国(南京)平和と友好のコンサート	
2010年	6th10周年コンサート(NHK大阪ホール)	
	日本のうたごえ祭典コンクール	銀賞
2011年	7th5月の風コンサート(阿部野区民センター)	
	第1回被災地支援コンサート(陸前高田市、大船渡市)	
2012年	8th「昂」ってどんなところ?コンサート(阿部野区民センター)	
	第2回被災地支援コンサート(陸前高田市、大船渡市)	
2013年	日本のうたごえ祭典・おおさか(大阪城ホール)	
	男性のうたごえ(おらぁごころい)の中心として活動	
2014年	9thよき春よ!たちあがれ!コンサート(クレオ中央)	
	日本のうたごえ祭典コンクール	銀賞
2015年	日本のうたごえ祭典コンクール	銅賞
2016年	10thつきとめよう明日への歌コンサート(いずみホール)	
	日本のうたごえ祭典コンクール	銅賞

あなたもうたごえの和の中へ

「昂」団員募集

○練習日

毎月の第1・3の金曜日18:00～20:30

毎月の第3・5の日曜日14:00～17:00

○団費 月3,000円

○月1回の声楽教室(個人指導)を開催しています

○団内コンサートを、年1回行っています



ねむかホール

〒542-0012
大阪府中央区谷町7-1-39
新谷町第2ビル308号

地下鉄谷町線「谷町6丁目」
3番出口を南へ徒歩3分左側
「coco壱番屋」の手前に入る
3階(308号)へどうぞ

お問い合わせ

立川孝信 (06-6777-6736 携帯 090-6058-5652)
本並美穂 (06-6933-0565 携帯 090-9270-2971)
岡邑洋介 (06-6998-9260 携帯 090-8168-9347)

「昂」第11回コンサートのチラシゲラ添付します。今回は、特別団員とともに歌う「沖縄」とキャッチの「一この道をゆこ
うよー」で、沖縄のこんな素晴らしいところ、明るい希望のもてる写真(沖縄万座毛)でレイアウトしてみました。
ご検討よろしくお願いします。(チラシ第1稿・改訂あり)

No.598(3/8)

○「花の歌」のリズム取り (伊藤)

各拍を 3 連符で歌うようなリズム取りで、且つ、となりの拍にまたがるタイが多用されているリズムなので、譜面をじっくりとよく見ていないと、指示されたリズム通りに歌うのが難しい。

リズムがうまく取れてない人は、どの小節も一拍目・2 拍目・3 拍目・4 拍目の境がどこにあるのかが、目で見てわかるように、各自の楽譜すべての箇所に、各拍の境目に縦線などを鉛筆(後で消せるように)で、書き込んでください。

譜面を見て、視覚的に理解して歌うのが有効だと思います。

そして、どのフレーズも拍節感がしっかりと身につくまで、伸ばす音では、8 分音符の刻み毎に母音を言う感じで、所定の長さに伸ばすような工夫をして歌ってみてください。

但し、拍節感が身についたら、これを止めて、言葉の抑揚に合わせた強弱重視の歌い方に戻して(変えて)いかねばなりません。(2016.12. 3 記)

○「昴」を飾るフィナーレの演出について(川妻) (2017.1.15 記)

聴衆のみなさんと共に「我はゆく・・・」と“熱い思いでともに進んでいこう”と

今回のコンサートの選曲や流れは大変工夫されていると思います。特に第 1 部は昴ならではの選曲で、慣れない人にはちょっと歯ごたえがあるかもしれませんが、多くの人に是非とも聞いてほしいし噛みしめてほしい粒よりの曲ばかりだと感じました。第 2 部では先日のレッスンで「沖縄を返せ」を歌ったとき、会場の人も歌ってくれるのではないかと、自分が会場にいたら思わず歌うだろうなと思いました。きっとすばらしいコンサートになるだろうと今からわくわくしています。

一つだけ意見ですが、最後の「昴」について、きちんと歌い上げれば格調高く締めくくれると思うのですが、後半を会場の人と一緒に歌ったらどうかと思います。

理由は、その前のシックスペンスでの会場と一体になった盛り上がりですが、途切れてしまうような気がするからです。それと、最後、昴の歌を聞いて終わりではなく、「この道を行こうよ」と呼びかけたコンサートに参加したお客さん一人一人が、それに応えて「我はゆく・・・」と一緒に歌うことで、熱い思いをもってともに進んでゆこうという、温かい交流のあるフィナーレになるのではないかと思います。

具体的な流れですが

シックスペンスでステージに広がって歌ったそのままの位置で、昴を歌います。後半「アアアア・・・」のあと「ああいつの日か」からお客さんにも歌ってもらいます。(指揮者客席へ向く、司会者がマイクで歌詞をいう)「我はゆく・・・」で全員ステージの最前列へ出て歌う、最後 2 回目の「さらば・・・」で後ずさりしながら手を振りながら終わる。そんなイメージです。どうでしょうか

○各位 昨年「うたごえ新聞係」の会議で配布した資料です。(岡邑)(2017. 1. 8記)

「沖縄を返せ」 荒木栄作曲

1956年9月、大分県で開かれた「第4回九州のうたごえ」には、初参加の沖縄代表も含め7000人が集まった。

創作曲で1位になったのは全司法福岡高裁支部の「沖縄を返せ」であった。

この時の原曲は短調で歌詞は力強いが「曲想が暗すぎる」という感想であった。その頃福岡県平和委員会から全九州合唱団会議に申し入れがあった。「東京の砂川は『赤とんぼ』でがんばっている。我々はこれに呼応して来年、九州から沖縄返還を訴える行進団を組織する。この中で歌える沖縄行進の歌をつくって頂きたい」であった。

全九州合唱団会議は荒木栄に手紙を書き「行進曲風に変えてほしい」と依頼した。1週間で編曲は完成した。

荒木栄は「民族の怒りをたたき込むつもりで歌っていただければ力強いものになると思います」というメモを添えた。

年末の「日本のうたごえ祭典」に九州代表はこの歌で参加した。当時の全司法新聞には「平和への祈りを込めて大会場割れよとばかりに歌えば、満場の盛大な拍手を浴びた」とある。

57年1月鹿児島から東京までの最初の日本縦断の「沖縄行進」の道筋で高らかに歌われた。沖縄の現状に国民が目を向けるきっかけとなった。

1985年、荒木が亡くなった福岡県大牟田市の米の山病院に「荒木栄碑」が建てられた。除幕式に沖縄から詩が贈られた。「沖縄戦から40年のこの年に、あなたの碑が建てられます。・・・沖縄のたたかいの歴史を支えたのは、あなたのみずみずしい豊かな温かい心をくぐってうまれた『沖縄を返せ』の歌でした。・・・」

今、辺野古の座りこみをする人々がこの歌で抵抗する。

最後の「沖縄を返せ」のあと「沖縄に返せ」と歌詞を替えられて歌うようにもなった。」

(「ジャーナリスト伊藤千尋の”こうして生まれた日本の歌②” うたごえ新聞 2016.5.2号参照)



「聴き手にとどくための演奏 選曲は命綱、聴く力、批評力」

2016 日本のうたごえ祭典 in えひめ「合唱発表会演奏批評座談会」より

「季刊日本のうたごえ 174号」

「日本のうたごえ祭典 in えひめ」の合唱発表会各部門の審査講評責任者の座談会が「季刊日本のうたごえ」最新号のトップ記事として掲載されました。昂にとってもまた歌う者にとっても参考になるかと思われる意見が述べられています。抜粋し記載しました。(昂ニュース編集部)

「合唱の基本、何を歌うかが問われている。＜一般の部 A＞」

・今回は(松山という地理的条件)のこともあり、予選 1 位の団体が本選出場辞退・・いろいろな問題があると思いますが、条件を克服して出場するということもその合唱団の実力、全国の合唱発表会で競い合うことが運動にとっても、その合唱団にとっても大切なことだという認識を深めないといけないのでは。

・演奏では、違いが際立つ団体が今回はなかった。自分たちが何を歌うとか、どう歌うかということを合唱団としてもっとつきつめるべきでないかという意見が結構多く出されました。

・「いわゆる合唱する基本、声が合う、音程が合う、もちろん音色も、全体が一つになって歌っている、合唱で伝わってくる魅力、すごさというものが弱い。そこら辺の追求がもっとされる必要があると思いました。

合唱の基本を、日々の練習の中で作り込む必要があるという思いをしました。

・「表現力も上がっている」「合唱のレベルも上がっている」けれど同時に「この合唱団の良さは何か」が講評に書けない。歌っている、良いんだけど、「書けない」。それは何を意味しているのか。合唱のレベルも、表現力も上がっているとすれば、さらに今、うたごえ運動として何を歌っていくのか、各合唱団がどういうものを歌っていくのかということをもっとお互いに刺激しあって、作品を紹介しあっていく努力をしなければ・・と思いました。

「人数が多い」「力はある」そこで求められる共感を呼ぶ演奏＜一般の部 B＞

・この部門は人数も多いということもあり、声のヴォリュームもあり、聴きごたえがありました。人数の多いところは声がよく鳴って届きました反面、この人数ならもっと鳴らして欲しいという要求はありました。その中でやはり上位団体は声の問題はクリアしていたのかなと感じました。

・総じて「人数が多い」「力がある」という総評ですが、何をどう届けるかという演奏表現が話題になりました。一つには男声合唱団昂(大阪)です。聴いている人に共感を与える、「おれもあの中に入って歌ってみたいな」と思わせるものがある。それは何かということをもっと分析したいと思います。

また合唱団「白樺」(東京)も一貫してロシアの歌を歌っている、その独自の表現、風格が評価されました。このことは私たちが何を届けていくのか、どう歌うのかということの一つのヒントになるのかなと思います。



「音楽で表現する追求を深めたい」＜一般の部 A＞＜一般の部 B＞

・合唱としての基本的な演奏力をきちんと備えることが＜A＞にも＜B＞にも言えること。

No.598(6/8)

・選曲と表現という点では、特に＜A＞の場合は言葉のメッセージ性に終始している団体が多かった。・・選曲を通してこの合唱団がどういうことを表現したいのか、・・そのことを通してその合唱団がどういうことを伝えたいのかが、音楽としてもう一つ伝わってこない・・・

・＜B＞：曲に内容表現、もっと音楽で表現していくことを追求して欲しいなどというのがあります。
・幅広い年代で構成された合唱・「ユニバーサルな合唱」づくりを目標にして、もっと伸びて欲しい。
特に上位団体はレベルの高い演奏を聴かせてくれた。
・＜B＞についての講評委員の受け止め方はそれぞれで、ある団体の演奏は感情移入が過多であるとおっしゃっている方もいるし、すべての人を納得させる演奏なんてありえない。が、やはり、合唱としての基本的な演奏力をちゃんと備えることは大前提で、そのうえでその合唱団の持っている伝えたい音楽的な中身を考えていくとよい演奏になっていくんじゃないか。

「自分たちはこの歌を！」と提出する演奏

・「演奏創造」について、「際立った団体」「粗削りだが迫ってくるものがあった団体」
＜A＞で「この合唱団は納得して歌っている、伸びやかに伝わってくる団体は輝いています。例えば「仙台合唱団」やはり自分たちがこの歌を歌う、東日本大震災、その後の気持ちを込めたものが伝わってくる。「山形センター合唱団」本当に歌う喜びをもって歌うというか、自信をもって歌っている。けれん味のない演奏ですばらしかった。それはその合唱団の持ち味ということだけでなく、やはり日常活動、自分たちはどういう合唱団かということからくる、一つの演奏の「らしさ」だと思う。そういうことをもっと出して欲しいと思う合唱団がたくさんありました。

・＜A＞で、「やはり金賞・銀賞に選ばれる団体は一味違っていますね。その合唱団に若い人がいるとかいないとか、その影響は大きい。合唱の基本的なところとともに、もっと伸びやかに歌う、イキイキと歌うというところを大事にしたい。こじんまりと歌うとか、収まったところで歌う傾向がちよっとあるのではないかな・・・

「ことばを音楽に乗せる」

＜女性の部＞音楽をつくるうえでも、ピッチ、ハーモニーの問題など基本的にありますが、上位団体は言葉の持っているセンシビリティというか感受性です。「ひろい」とか「さあ」と呼びかけるときの色合いが本当にそういうような気持ちになっているところと、文字面だけ追っているところと。そして助詞の処理。俗にいう「てにおは」などの処理がぞんざいで一本調子になって山がない。声だけの響きだけでなく、ことばをどう処理しているのかに意を砕いている団体と、自由に？歌いっぱなしの団体とは当然と伝わってくる深みがちがってくる。さらに言えばピアノとのバランスがどうなのかも含めてありましたね。

・「山形センター合唱団」：非常に生活感のある声で無理がない。自分たちの思いが素直に出ている。相当修練を積んでいて、全員の子音がピシッと合っている。そのことによって統一感を持った音楽と、説得性があるなと思いました。“うたごえ”の良さはいろいろあると思いますが、一つは生身の生活者の思い、それがけれん味なく伝わるのが魅力だと感じました。

「指揮者と団員の方向が一致した音楽づくり」

・「統一感のある演奏」というのは、上位団体はそういう特徴を持っている。それがどういうところから来ているかということ、やはり指揮者とか、その合唱団の指導者が合唱団でどういう音楽をつくっていくか No.598(7/8)

というものを持って、一致して目指している団体は統一感がある。つまりそれは合唱としてのまとまりをつくることに心を砕いている結果だと思う。そのことが、上位団体のひとつの大きな特徴で、指揮者と団員がその方向で一致している団体は良い演奏になっていくんです。そういうものは一朝一夕にはできなくて、積み重ねなんですね。

「届ける演奏の経験を積む」

・＜職場の部＞国鉄の人たちが10人ちょっとなのに、すごい。声もあるけれど、日常的な演奏活動がすごいんじゃないかと思います。音響も何もない、ホールも響かないような所でもすごい数の演奏をしている。保母さんもそうですね。あっちこっちかけまわって演奏している。聴いていて違うし、歌い手も違ってくるんじゃないかなと思います。

・いろんな所で演奏するということは、相手がいるわけで、相手に向かって自分たちの演奏を届けるという経験をたくさん積んでいる団体は、声というか、音楽が届いていると思うんです。そういうことが日常的にできているところは強いなと感じました。

・これはアマチュアだけの話じゃなくて、プロだって、どれくらい聴衆の前で自分の演奏をやっているかという、まあ場数を踏むという言葉もありますけれども、その量から質への転化というものもあるんですよ。そういう違いがでてくるんじゃないかなと思いました。

「選曲は命綱」

・演奏にとっての選曲は、その演奏団体の表現の9割くらいを占めるほどのウエイトがあると思います。それがいかにもイージーな選曲をしている団体が多いというのがちょっと気になりました。

・この曲を歌おうという提案が誰かからされた時に、何で今この曲なのかと徹底的に論じ合って選曲されたのかなという団体と。もちろん、歌いたいから歌うのは大事ですが、・・やはり、外に打って出ようと思った時に、本当にこの曲で何を伝えるかということまで、選曲で舞台の半分以上決まる部分もありますから。選曲を超える演奏というのが出てきてほしいけれど、選曲でメッセージはもう決まりましたという演奏になってしまうとちょっと・・。あだから今この曲なのかという演奏までたどりついている団体。

「演奏を聴く耳」

・「合唱能力、基本的な演奏能力をどうたかめるか」について、選曲もそうですが、今自分が歌っていることが伝わっているかどうかを聴く耳。感性というか、それが大事ですね。例えば、選曲する。こういうメッセージを届ける歌だから、と。選曲の次に大事なものは、どういう曲想で、どういう音使いで歌うのかを考える。演奏会で受けるか受けないかということだけでなく、自分たちの表現力をどう高めていくか、どういうハーモニー、どういうバランス、音色などを学びあう、学びあえる機会、それがコンクールの持っている良さだと思います。

・「演奏をもっと聴く」ということ。自分たちもそうだけど、他の団体をもっと聴く。あるいは1つの同じ曲でも、いろんな団体が演奏するのを聴く。その時、何でこうなるの？と否定的に受け止める演奏があってもいいんですよ。その中で、納得できる演奏、ここはちょっと違うなと感じる演奏、そういうことを感じていく“聴く体験”をもっと積んでいく必要があるんです。全国のこの合唱発表会は、本当に全国から集まって交流・発表するわけだから、それができる。ある団体は出番を待っている時に他のいい演奏が聴けなくて残念だったと言っている。運営面で難しいことがあるかもしれませんが、もっと聴きあうことをしないとつまらないし、残念です。